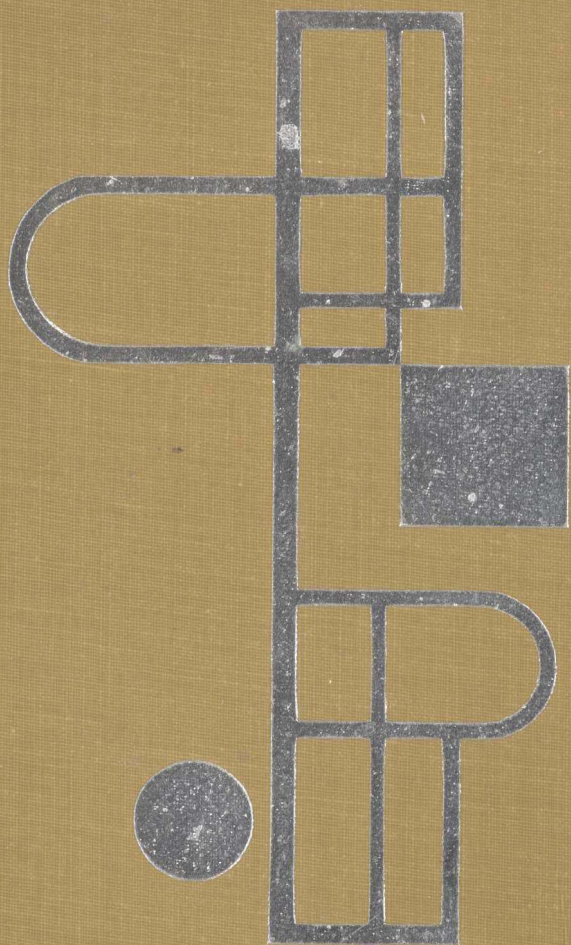




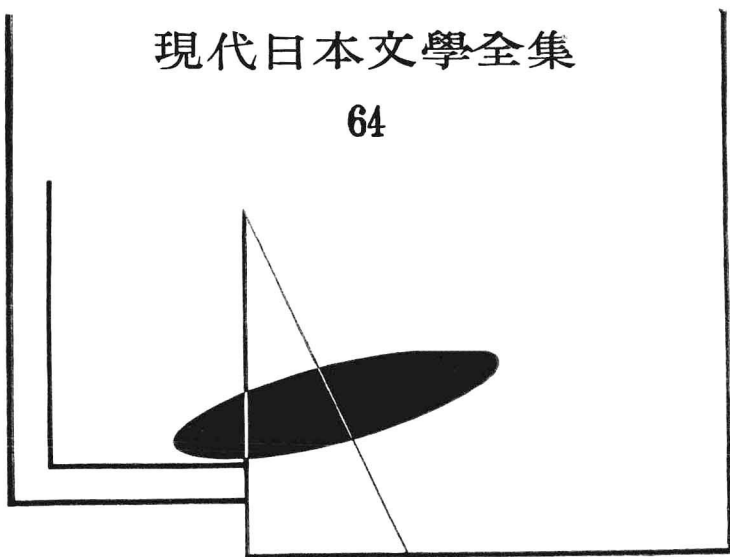
夏目漱石

集

(二)

現代日本文學全集

64



筑摩書房版

夏目漱石集 (二)

昭和三十一年五月十日 印刷
昭和三十一年五月十五日 發行

著者 夏^{なつ}目^め漱^{そう}石^{せき}

東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行者 古 田 晁

東京都新宿區改代町二三

印刷者 多 田 基

東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行者 筑 摩 書 房

(電話)東京二九局(29)七六五一(代表)

振替 東京 一六五七六八

整版株式會社 精興社
印刷多田印刷株式會社
製本和田製本工業株式會社

夏目漱石集(二) 目次

吾輩は猫である 五

明 暗 一八六

硝子戸の中 三八八

漱石における二三の問題(片岡良一) 四三〇

解 説 四三八

装幀
恩地孝四郎

夏
目
漱
石
集
(二)

吾輩は猫である

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頼と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめ／＼した所でニャー／＼泣いて居た事は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間中で一番癡悪な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕へて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考もなかつたから別段恐しいとは思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハ／＼した感じが有つた許りである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間といふものの見始であらう。此時妙なものとどと思つた感じが今でも残つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつる／＼して丸で藥罐だ。其後猫にも大分違つたがこんな片輪には一度も出會はした事がない。加之顔の真中が餘りに突起して居る。さうして其穴の中から時々ぶうぶうと煙を吹く。どうも咽せはくて實に弱つた。是が人間の飲む烟草といふものである事は漸く

此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持で坐つて居つたが、暫くすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助かないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るがあとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が付いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。果てな何でも容子が可笑いと、のそ／＼這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藥の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向ふに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別に是といふ分別も出ない。暫くして泣いたら書生が又迎に來てくれるかと考へ付いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も來ない。其内池の上をさら／＼と風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて來た。泣き度でも聲が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をしてそり／＼と池を左に廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くと漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。

縁は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。俗邸へは忍び込んだもの、是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて來るといふ始末でもう一刻も猶豫が出来なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かさうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の内に這入つて居つたのだ。こゝで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機會に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。是は前の書生より一層亂暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いや是は駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て臺所へ這ひ上つた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上り、這ひ上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつく／＼いやになつた。此間おさんの三馬を喰んで此返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出され様としたときに、此家の主人が騒々しい何だといひながら出て來た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて此宿なしの小猫がいくら出しても出しても御臺所へ上つて

来て困りますといふ。主人は鼻の下の黒い毛を
 捻りながら吾輩の顔を暫らく眺めて居つたが、
 やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ奥
 へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を開かぬ人
 と見えた。下女は口惜しさうに吾輩を臺所へ抛
 り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住
 家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。
 職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日
 書齋に這入つたがり殆んど出て来る事が無い。
 家のものは大變な勉強家だと思つて居る。當人
 も勉強家であるかの如く見せて居る。然し實際
 はうちのものがいゝ様な勉強家ではない。吾輩
 は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼は
 よく晝寐をして居る事がある。時々讀みかけて
 ある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮
 膚の色が淡黄色を帯びて彈力のない不活潑な微
 候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯
 を食つた後でタカヂヤスターゼを飲む。飲んだ
 後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くな
 る。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返
 す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事が
 ある。教師といふものは實に樂なものだ。人間
 と生れたら教師となるに限る。こんなに寐て居
 て勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。
 夫でも主人に云はせると教師程つらいものはな
 いさうで彼は友達が来る度に何とかかんとかな
 平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外の

ものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても
 跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。
 如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名
 前さへつけてくれなかつたのも分る。吾輩は仕方
 がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた
 主人の傍に居る事とめた。朝主人が新聞を
 讀むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が晝寐を
 するときは必ず其背中に乗る。是はあながち主
 人が好きといふ譯ではないが別に構ひ手がなか
 つたから已を得んのである。其後色々經驗の上、
 朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は
 縁側へ寝る事とした。然し一番心持の好いのは
 夜に入つてこゝのうちの小供の寢床へもぐり込
 んで一所にねる事である。此小供といふのは五
 つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一
 間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを
 容るべき餘地を見出してどうか、かうにか割
 り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒
 めます。最後大變な事になる。小供は——殊に小
 さい方が質がわるい——猫が来た／＼といつて
 夜中でも何でも大きな聲で泣き出すのである。
 すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼をさまし
 て次の部屋から飛び出して来る。現に先達て杯
 は物指で尻べたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする
 程、彼等は我儘なものと斷言せざるを得ない
 様になつた。殊に吾輩が時々同衾する小供の如
 きに至つては言語道斷である。自分の勝手な時
 は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛

り出したり、へつつひの中へ押し込んだりする。
 而も吾輩の方で少しでも手出しを仕様ものなら
 家内總がうりで追ひ廻して迫害を加へる。此間
 も一寸疊で爪を磨い入れられ細君が非常に怒つてそ
 れから容易に座敷へ入れられた。臺所の板の間で
 他が頼んで居ても一向平氣なものである。吾輩
 の尊敬する筋向の白君は逢ふ度毎に人間程不
 人情なものはないと言つて居らるゝ。白君は先
 日玉の様な子猫を四足産まれたのである。所が
 その家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持
 つて行つて四足ながら棄てゝ來たさうだ。白君
 は涙を流して其一部始終を話した上、どうして
 も我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的
 生活をするには人間と戰つて之を剿滅せねばな
 らぬといはれた。一々尤の議論と思ふ。又隣
 りの三毛君は人間が所有權といふ事を解して
 居ないといつて大に憤慨して居る。元來我々同
 族間では目刺の頭でも鰐の鱗でも一番先に見付
 たものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。
 もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へて
 善い位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念
 がないと見えて我等が見付た御馳走は必ず彼等
 の爲に掠奪せらるゝのである。彼等は其強力を
 頼んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて澄
 して居る。白君は軍人の家に居り三毛君は代言
 の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで
 居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂
 天である。唯其日／＼が何うにか斯うにか送ら
 れればよい。いくら人間だつて、さういつ迄も

榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をし様。元來此主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほしい、ぎすへ投書をしたり、新體詩を明星へ出したり、間違ひだらけの英文をかいいたり、時によると弓に凝つたり、謠を習つたり、又あるときはグイオリン杯をブー／＼鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃腸の癖にいやに熱心だ。後架の中で謠をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣なもので、矢張是は平の宗盛にて候を繰返して居る。皆んながそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういふ考になつたのか吾輩の住み込んでから一月許りの後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわだ／＼歸つて來た。何を貰つて來たのかと思ふと水彩繪具と毛筆とワツトマンといふ紙で今日から謠や俳句をやめて繪をかく決心と見えた。果して翌日から當分の間といふものは毎日々々書齋で晝寐もしないで繪許りかいて居る。然し其かき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。當人もあまり甘くないと思つたものか、さる日其友人で美學とかをやつて居る人が來た時に下の様な話をして居るのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると

何でもないう様だが自ら筆をとつて見ると今更の様に六づかし／＼感ずる」是は主人の述懐である。成程許りのない處だ。彼の友は金縁の眼鏡越に主人の顔を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像許りで畫がかける譯のものではない。昔以太利の大家アンドレアデル、サルトが言つた事がある。畫をかくなら何でも自然其物を寫せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活畫なりと。さうだ君も晝らしい畫をかうと思ふならちと寫生をしたら」

が見えた。

其翌日吾輩は例の如く縁側に出て心持善く晝寐をして居たら、主人が例になく書齋から出て來て吾輩の後で何かしきりにやつて居る。不圖眼が覺めて何をして居るかと一分計り細目に眼をあけて見ると、彼は餘念もなくアンドレアデル、サルトを極め込んで居る。吾輩は此有様を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に擲擧せられたる結果として先づ手初めに吾輩を寫生しつゝあるのである。吾輩は既に十分寐た。欠伸がしたくて堪らない。然し切角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思つて、ぢつと辛棒して居つた。彼は

今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩つて居る。吾輩は自由する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。脊といひ毛並といひ顔の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつゝある様な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。吾輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入りの皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事實と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、去ればとて是等を交ぜた色でもない。只一種の色であるといふより外に評し方のない色である。其上不思議な事は眼がない。尤も是は寐て居る所を寫生したのでから無理もないが眼らしい所さへ見えなから盲猫だか寐て居る猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレアデル、サルトでも是では仕様がたいと思つた。然し其熱心には感服せざるを得ない。可成なら動かずに居つてやり度と思つたが、先づきから小便が催ふして居る。身内の筋肉はむづ／＼す不得已失敬して兩足を前へ存分のして、首を低く押し出してあゝと大なる欠伸をした。さてかうなつて見ると、もう大人しくして居ても仕方がない。どうせ主人の豫定は打ち壞れたのだから、序に裏へ行つて用を足さうと思つてのそを這ひ出した。すると主人は失望と怒りを

掻き交ぜた様な聲をして、座敷の中から「此馬鹿野郎」と怒鳴つた。此主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎といふのが癖である。外に悪口の言ひ様を知らないのだから仕方がないが、今迄辛棒した人の氣も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼はりしは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の脊中へ乗る時に少しは好い顔でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれな事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間といふものは自己の力量に慢じて皆んな増長して居る。少し人間より強いものが出来て來て窘めてやらなくては此先どこ迄増長するか分らない。

我儘も此位なら我慢するが吾輩は人間の不徳に對して是よりも數倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪許りの茶園がある。廣くはないが瀟洒とした心持ち好く日の當る所だ。うちの小供があまり騒いで樂々晝寐の出来ない時や、餘り退屈で腹加減のよくない折杯は、吾輩はいつでも此所へ出て浩然の氣を養ふのが例である。ある小春の穩かな日の二時頃であつたが、吾輩は晝飯後快よく一睡した後、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の間を一本／＼嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、桔菊を押し倒して其上に大きな猫が前後不覺に寐て居る。彼は吾輩の近付くのも一向心付かざる如く、又心付くも無頓着なる如く、大きな聲をして長々と體を横へて眠つて居る。他

の庭内に忍び入りたるものが斯く迄平氣に睡れるものかと、吾輩は竊かに其大膽なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に投げかけて、きら／＼する柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出づる様に思はれた。彼は猫中の大王とも云ふべき程の偉大なる體格を有して居る。吾輩の倍は體かある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して餘念もなく眺めて居ると、靜かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つてば／＼と二三枚の葉が桔菊の茂みに落ちた。大王はくわつと其眞丸の眼を開いた。今でも記憶して居る。其眼は人間の珍重する琥珀といふものよりも遙かに美しく輝いて居た。彼は身動きもしない。雙眸の奥から射る如き光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、御めえは一體何だと云つた。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが何しろ其聲の底に犬をも挫しぐべき力が籠つて居るので吾輩は少なからず恐れを抱いた。然し挨拶をしないと險呑だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」と可成平氣を装つて冷然と答へた。然し此時吾輩の心臓は慥かに平時よりも烈しく鼓動して居つた。彼は大に輕蔑せる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきらめろ。全て／＼何にに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこゝの教師の家に居るのだ」「どうせそんな事だらうと思つた。いやに痞てるぢやねえか」と大王丈に氣焰を吹

きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思はれない。然し其宵切つて肥満して居る所を見ると御馳走を食つて居るらしい、豊かに暮して居るらしい。吾輩は「さう云ふ君は一體誰だい」と聞かざるを得なかつた。「已れあ車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒は此近邊で知らぬ者なき亂暴猫である。然し車屋丈に強い許りでちつとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になつて居る奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそはゆき感じを起すと同時に、一方で少々輕侮の念も生じたのである。吾輩は先づ彼がどの位無學であるかを試して見様と思つて左の問答をして見た。

「一體車屋と教師とはどつちがえらいだらう」

「車屋の方が強いに極つて居らあな。御めえのかちの主人を見ねえ、丸で骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫丈に大分強さうだ。車屋に居ると御馳走が食へると見えねえね」

「何におれなんぞ、どこの國へ行つたつて食ひ物に不自由はしねえ積りだ。御めえなんかも茶島ばかりぐる／＼廻つて居ねえで、ちつと己の後へくつ付いて來て見ねえ。一と月とたゝねえうちに見違へる様に太れるぜ」

「追つてさう願ふ事に仕様。然し家は教師の方が車屋より大きいのに住んで居る様に思はれる」

「笹棒め、うちなんかいくら大きたつて腹の足しになるもんか」

彼は大に肝癪に障つた様子で、寒竹をそいだ

様な耳を頻りとづく付かせてあらゝかに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。

其後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相當の氣焰を吐く。先に吾輩が耳にしたといふ不徳事件も實は黒から聞いたのである。或る日例の如く吾輩と黒は暖かい茶晶の中で寢轉びながら色々雑談をして居ると、彼はいつもの自慢話を左も新しうに繰返し返したあとで、吾輩に向つて下の如く質問した。「御めえは今迄に鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも餘程發達して居る積りだが腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覺悟はして居たものの、此間に接したる時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事實は事實で詐る譯には行かないから、吾輩は「實はとらうとらうと思つてまだ捕らない」と答へた。黒は彼の鼻の先からびんと突張つて居る長い鬚をびりびりと震はせて非常に笑つた。元來黒は自慢をする丈にどこか足りない所があつて、彼の氣焰を感じた様に咽喉をころ／＼鳴らして謹聴して居れば甚だ御し易い猫である。吾輩は彼と近付になつてから直に此呼吸を飲み込んだから此場合にもたまじい己れを辯護して益形勢をわるくするもの愚である、いつその事彼に自分手柄話をしやべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこで大人しく「君杯は年が年であるから大分とつたらう」とそののかしを見た。果然彼は牆壁の缺所に吶喊して來た。

「たんとでもねえが三四十はとつたらう」とは得意氣なる彼の答であつた。彼は猶語をつづけて「鼠の百や二百は一人でもいつでも引き受けるがいたちつてえ奴は手に合はねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」「へえ成程」と相槌を打つ。黒は大きな眼をほちつかせて云ふ。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持つて縁の下へ這ひ込んだら御めえ大きないたちの野郎が面喰つて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。此番生つて氣で追つかけてとう／＼泥濘の中へ追ひ込んだと思ひねえ」「うま／＼遣つたね」と喝采してやる。「所が御めえいざつてえ段になると奴め最後つ尻をこきやがつた。臭えの臭くねえのつて夫からつてえものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼は是に至つて恰も去年の臭氣を今猶感ずる如く前足を揚げて鼻の頭を二三遍まで廻はした。吾輩も少々氣の毒な感じがする。ちつと景氣を付けてやらうと思つて「然し鼠なら君に睨まれては百年目だらう。君は餘り鼠を捕るのが名人で鼠許り食ふものだからそんなに肥つて色つやが善いのだらう」黒の御機嫌をとる爲めに此質問は不思議にも反對の結果を呈出した。彼は喟然として大息して云ふ。「考げえると詰らねえ。いくら稼いで鼠をいふつたつて——一てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人のとつた鼠を皆んな取り上げやがつて交着へ持つて行きあがる。交着ちや誰が捕つたか分らねえか

ら其たんに五錢宛くれるぢやねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壹圓五十錢位儲けて居やがる癖に、餘なものを食せた事もありやしねえ。おい人間てものち體の善い泥棒だぜ」さすが無學の黒も此位の理窟はわかと見え、頗る怒つた容子で育中の毛を逆立て、居る。吾輩は少々氣味が悪／＼なつたから善い加減に其場を胡亂化して家へ歸つた。此時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。然し黒の子分になつて鼠以外の御馳走を獲つてあるく事もしなかつた。御馳走を食ふよりも寢て居た方が氣樂でいい。教師の家に居ると猫も教師の様な性質になると見える。要心しないと今に胃腸になるかも知れない。

教師といへば吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩畫に於て望まない事を悟つたものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

〇〇と云ふ人今日の日會で始めて出逢つた。あの人は大分放蕩をした人だと云ふが成程通人らしい風采をして居る。かう云ふ質の人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩をしたと云ふよりも放蕩をする可く餘儀なくせられたと云ふのが適當であらう。あの人の妻君は藝者ださうだ、羨ましい事である。元來放蕩家を悪くいふ人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。又放蕩家を以て自任する連中のうちに、放蕩する資格のないものが多い。是等は餘儀なくされないのに無理に進んでやるのである。恰も吾輩の水彩畫に於るが如き

もので到底卒業する氣づかひはない。然るにも關せず、自分丈は通人だと思つて澄して居る。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るといふ論が立つなら、吾輩も一廉の水彩畫家になり得る理窟だ。吾輩の水彩畫の如きはかゝない方がましであると同じ様に、愚昧なる通人よりも山出しの大野驀の方が遙かに上等だ。

通人論は一寸首肯しかねる。又藝者の妻君を羨しい杯といふ所は教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩畫に於ける批評眼文は慥かなものだ。主人は斯くの如く自知の明あるにも關せず其自惚心は中々抜けないうち二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いて居る。

昨夜は僕が水彩畫をかくて到底物にならんと思つて、そこらに抛つて置たのを誰かゞ立派な額にして欄間に懸けて呉れた夢を見た。

俗額になつた所を見ると我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。是なら立派なものだと獨りで眺め暮らして居ると、夜が明けて眼が覺めて矢張り元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつて仕舞つた。

主人は夢の裡迄水彩畫の未練を背負つてゐて居ると見える。是では水彩畫家は無論夫子の所謂通人にもたれない質だ。

主人が水彩畫を夢に見た翌日例の金縁眼鏡の美學者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭第一に「畫はどうかね」と口を切つ

た。主人は平氣な顔をして「君の忠告に従つて寫生を力めて居るが、成程寫生をするといふ迄氣のつかなくなつた物の形や、色の精細な變化杯がよく分る様だ。西洋では昔から寫生を主張した結果今日の様に發達したものだと思はれる。さうがアンドレア、デル、サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないで、又アンドレア、デル、サルトに感心する。美學者は笑ひながら「實は君、あれは出鱈目だよ」と頭を掻く。「何が」と主人はまだ譴はれた事に氣がつかない。「何が」つて君の頻りに感服して居るアンドレア、デル、サルトさ。あれは僕の一寸捏造した話だ。君がそんなに眞面目に信じて居ると思はなかつたハ、ハ、ハ」と大喜悅の體である。吾輩は縁側で此對話を聞いて彼の今日の日記には如何なる事が記さるゝであらうかと豫め想像せざるを得なかつた。此美學者はこんな好加減な事を吹き散らして人を撥ぐのを唯一の樂にして居る男である。彼はアンドレア、デル、サルト事件が主人の情線に如何なる響を傳へたかを毫も顧慮せざるものゝ如く得意になつて下の様な事を饒舌つた。「いや時々冗談を云ふと人が眞に受けるので大に滑稽的美感を挑撥するのは面白い。先達である學生にニコラス、ニツクルペーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる佛國革命史を佛語で書くのをやめて英文で出版させたと言つたら、其學生が又馬鹿に記憶の善い男で、日本文學會の演說會で眞面目に僕の話を通りを繰り返したのは滑稽であつた。所が其時の傍

聽者は約百名許りであつたが、皆熱心にそれを傾聴して居つた。夫からまだ面白い話がある。先達て或る文學者の居る席でハリソンの歴史小説セオファアーノの話が出たから僕はあれは歴史小説の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬ所は鬼氣人を襲ふ様だと評したら、僕の向ふに坐つて居る知らんと云つた事のない先生が、さう／＼あすこは實に名文だといつた。それで僕は此男も矢張り僕同様此小説を讀んで居らないといふ事を知つた」神經胃弱性の主人は眼を丸くして聞ひかけた。「そんな出鱈目をいつて若し相手が讀んで居たらどうする積りだ」恰も人を欺くのは差支ない、只化の皮があらはれた時は困るぢやないかと感じたものゝ如くである。美學者は少しも動じない。「なに其時や別の本と間違へたと何とか云ふ許りさ」と云つてけられら笑つて居る。此美學者は金縁の眼鏡は掛けて居るが其性質が車屋の黒に似た所がある。主人は黙つて日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云はん許りの顔をして居る。美學者はそれだから畫をかくても駄目だといふ目付で「然し冗談は冗談だが畫といふものは實際六づか數ものだよ、レオナルド、ダ、ビンチは門下生に寺院の壁のしみを寫せと教へた事があるさうだ。なる程雪隠杯に這入つて雨の漏る壁を餘念なく眺めて居ると、中々うまい模様畫が自然に出来て居るぜ。君注意して寫生して見給へ屹度面白いものが出来るから」「又欺すのだらう」「いへ是丈は慥かだよ。實際奇警な語ちや

ないか、ダ、ギンチでもいひさうな事だね」
「成程奇聲には相違ないな」と主人は半分降参をした。然し彼はまだ雪隠で寫生はせぬ様だ。

車屋の黒は其後跳になつた。彼の光澤ある毛は漸々色が褪めて抜けて来る。吾輩が琥珀よりも、美しいと評した彼の眼には眼脂が一杯たまつて居る。殊に著るしく吾輩の注意を惹いたのは彼の元氣の消沈と其體格の悪くなつた事である。吾輩が例の茶園で彼に逢つた最後の日、どうだと言つて尋ねたら「いたちの最後尻と看屋の天秤棒には懸ただ」といつた。

赤松の間に二三段の紅を綴つた紅葉は昔の夢の如く散つてつくばひに近く代る／＼花びをこぼした紅白の山茶花も残りなく落ち盡した。三間半の南向の縁側に冬の日脚が早く傾いて木枯の吹かない日は殆んど稀になつてから吾輩の晝寢の時間も狭められた様な氣がする。

主人は毎日學校へ行く。歸ると書齋へ立て籠る。人が来るも、教師が厭だ／＼といふ。水彩畫も減多にかかない。タカヂヤスターでも功能がないといつてやめて仕舞た。小供は感心し休まないで幼稚園へかよふ。歸ると唱歌を歌つて、毯でついて、時々吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食はないから別段肥りもしないが、先々健康で跛にもならずに其日／＼を暮して居る。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌ひである。名前はまたつけて呉れないが、欲をいつても隠限がないから生涯此教師の家で無名の猫で終る積りだ。

二

吾輩は新年來多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜらるゝのは難い。

元朝早々主人の許へ一枚の繪端書が來た。是は彼の交友某畫家からの年始狀であるが、上部を赤、下部を深緑りで塗つて、其の真中に一の動物が蹣跚つて居る所をバステルで書いてある。主人は例の書齋で此繪を、横から見たり、堅から眺めたりして、うまい色だなといふ。既に一應感服したものだから、もうやめにするかと思ふと矢張り横から見たり、堅から見たりして居る。からだを拗ぢり向けたり、手を延ばして年寄が三世相を見る様にしたり、又は窓の方へむいて鼻の先迄持つて來たりして見て居る。早くやめて呉れないと膝が揺れて險吞でたまらない。

漸くの事で動搖が餘り劇しくなくなつたと思つたら、小さな聲で一體何をかいたのだらうと云ふ。主人は繪端書の色には感服したが、かいてある動物の正體が分らぬので、先つきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ繪端書かと思ひながら、寐て居た眼を上品に半ば開いて、落付き拂つて見ると紛れもない、自分の肖像だ。主人の様にアンドレア、デル、サルを極め込んだものでもあるまいが、畫家丈に形體も色彩もちやんと整つて出來て居る。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫ぢやない吾輩である事が判然とわかる様に立派に描いてある。この位明瞭な事を分

らずにかく迄苦心するかと思ふと、少し人間が氣の毒になる。出來る事なら其繪が吾輩であると云ふ事は知らしてやりたい。吾輩であると云ふ事は好し分らないにしても、せめて猫であるといふ事は分らして遣りたい。然し人間といふものは到底吾輩猫屬の言語を解し得る位に天の恵に浴して居らん動物であるから、残念ながら其儘にして置いた。

一寸讀者に斷つて置きたいが、元來人間が何ぞといふと猫々と、事もなげに輕侮の口調を以て吾輩を評價する癖があるは甚だよくない。人間の槽から牛と馬が出來て、牛と馬の糞から猫が製造された如く考へるのは、自分の無智に心付かんで高慢な顔をする教師杯には有勝の事でもあらうが、はたから見えて餘り見ともいへ者ぢやない。いくら猫だつて、さう粗末簡便には出來ぬ。よそ目には一列一體、平等無差別、どの猫も自家固有の特色杯はない様であるが、猫の社會に這入つて見ると中々複雑なもので十人十色といふ人間界の語は其儘こゝにも應用が出来るのである。目付でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違ふ。髯の張り具合から耳の立ち按排、尻尾の垂れ加減に至る迄同じもの一つもない。器量、不器量、好き嫌ひ、粹無粹の數を悉くして千差萬別と云つても差支へない位である。其様に判然たる區別が存して居るにも關らず、人間の眼は只向上とか何とかいつて、空ばかり見て居るものだから、吾等の性質は無論相貌の末を識別する事すら到底出來ぬのは氣

の毒だ。同類相求むとは昔からある語だ。が其通り、餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事なら矢張り猫でなくては分らぬ。いくら人間が發達したつて是許りは駄目である。況んや實際をいふと彼等が自ら信じて居る如くえらくも何ともないのだから猶更甚かしい。又況んや同情に乏しい吾輩の主人の如きは、相互を残りなく解するといふが愛の第一義であるといふことすら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の悪い牡蠣の如く書齋に吸ひ付いて、嘗て外界に向つて口を開いた事がない。それで自分丈は頗る達觀した様な面構をして居るのは一寸可笑い。達觀しない證據には現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟つた様子もなく今年には征露の第二年目だから大方熊の畫だらう杯と氣の知れぬことをいつて澄して居るのもわかる。

吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながら斯く考へて居ると、やがて下女が第二の繪端書を持つて來た。見るに活版で舶來の猫が四五疋ずつと行列してペンを握つたり書物を開いたり勉強をして居る、その内の一疋は席を離れたり机の角で西洋の猫ぢや／＼を躍つて居る。其上に日本の壁で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、右の側に書を読むや猫の春一日といふ俳句さへ認められてある。是は主人の舊門下生より來たので誰が見たつて一見して意味がわかる筈であるのに、迂闊な主人はまだ悟らないと見えて不思議さうに首を捻つて、はてな今年は猫の年かなと獨言をいつた。吾輩が是程有名にな

つたのを未だ氣が着かずに居ると見える。

所へ下女が又第三の端書を持つてくる。今度には繪端書ではない。恭賀新年とかいて、傍らに乍、恐縮かの猫へも宜しく御傳聲奉願上候とある。如何に迂闊な主人でもかう明らさまに書いてあれば分るものと見えて漸く氣が付いた様にフンと言ひながら吾輩の顔を見た。其眼付が今迄とは違つて多少尊敬の意を含んで居る様に思はれた。今迄世間から存在を認められなかつた主人が急に一個の新局面を施したのも、全く吾輩の御蔭だと思へば此位の眼付は至當だらうと考へる。

折柄門の格子がチリン、チリン、チリ、ンと鳴る。大方來客であらう、來客なら下女が取次に出る。吾輩は着屋の梅公がくる時の外は出ない事に極めて居るのだから、平氣で、もの如く主人の膝に坐つて居つた。すると主人は高利貸にでも飛び込まれた様に不安な顔付をして玄關の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間も此位偏屈になれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのに夫程の勇氣も無い、愈牡蠣の根性をあらはして居る。しばらくすると下女が來て寒月さんが御出になりましたといふ。此寒月といふ男は矢張り主人の舊門下生であつたさうだが、今では學校を卒業して、何でも主人より立派になつて居るといふ話である。此男がどういふ譯か、よく主人の所へ遊びに来る。來ると自分を戀つて居る女が有りさうな、無ささ

うな、世の中が面白さうな、詰らなさうな、凄いな様な艶っぽい様な文句許り並べては歸る。主人の様なしなび懸けた人間を求めて、懇々こんな話しをしに来るのからして合點が行かぬが、あの牡蠣の主人がそんな談話を聞いて時々相槌を打つのは猶面白い。

「暫く御無沙汰をしました。實は去年の暮から大に活動して居るものですから、出様々々と思つても、つい此方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎見た様な事をいふ。「どつちの方角へ足が向くかね」と主人は眞面目な顔をして、黒木綿の紋付羽織の袖口を引張る。此羽織は木綿でゆきが短かい、下からべんべら者が左右へ五分位宛はみ出して居る。「エへ、少し違つた方角で」と寒月君が笑ふ。見ると今日は前歯が一枚缺けて居る。「君齒をどうかしたかね」と主人は問題を轉じた。「え、實はある所で椎茸を食ひましてね」「何を食つたつて?」「其、少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘を前歯で噛み切らうとしたらぼろりと齒が缺けましたよ」「椎茸で前歯がかかるんなら、何だか爺々臭いね。俳句にはなるかも知れないが、戀にはならん様だな」と平手で吾輩の頭を軽く叩く。「あゝ其猫が例のですか、中々肥つてるぢやありませんか、夫なら草屋の黒にだつて負けさうありませんね、立派なものだ」と寒月君は大に吾輩を賞める。「近頃大分大きくなつたのさ」と自慢さうに頭をぽか／＼なぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。

「昨夜もちよいと合奏會をやりましてね」と寒月君は又話しをもとへ戻す。「どこで」「どこでもそりや御聞きにならんでもよいでせう。グイオリンが三挺とピアノの伴奏で中々面白かつたです。グイオリンも三挺位になると下手でも聞かれるものです。二人は女で私其の中へまじりましたが、自分でも善く弾けたと思ひました」「ふん、そして其女といふのは何者か」と主人は羨ましさうに問ひかける。元來主人は平常枯木寒巖の様な顔付はして居るものゝ、實の所は決して婦人に冷淡な方ではない、嘗て西洋の或る小説を讀んだら、其中にある一人物が出て來て、其が大抵の婦人には必ずちよつと惚れる。勘定をして見ると往來を通る婦人の七割弱には戀着るといふ事が諷刺的に書いてあつたのを見て、これは眞理だと感心した位な男である。そんな浮氣な男が何故牡蠣の生涯を送つて居るかと云ふのは吾輩猫杯には到底分らない。或人は失戀の爲だとも云ふし、或人は胃腸のせゐだとも云ふし、又或人は金がなくて臆病な性質だからだとも云ふ。どつちにしたつて明治の歴史に關係する程な人物でもないのだから構はない。然し寒月君の女連れを羨まし氣に尋ねた事実は事實である。寒月君は面白さうに口取の蒲鉾箸で挟んで半分前歯で食ひ切つた。吾輩は又缺けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であつた。「なに二人とも去る所の令嬢ですよ、御存じの方ぢやありません」と餘所々々しい返事をする。「ナール」と主人は引張つたが「程」

を略して考へて居る。寒月君はもう善い加減な時分だと思つたものか「どうも好い天氣ですな、御閑なら御一所に散歩でもしませうか、旅順が落ちたので市中は大變な景氣ですよ」と促がして見る。主人は旅順の陥落より女連の身元を聞きたいと云ふ顔で、しばらく考へ込んで居たが漸く決心をしたものと見えて「それぢや出ると仕様」と思ひ切つて立つ。矢張り黒木綿の紋付羽織に、兄の記念とかいふ二十年來着古した結城紬の綿入を着たまゝである。いくら結城紬が丈夫だつて、かう着つてくればはたまらない。所々が薄くなつて日に透かして見ると裏からつぎを當てた針の目が見える。主人の服裝には師走も正月もない。ふだん着も餘所ゆきもない。出るときは懷手をしてぶらりと出る。外に着る物がないからか、有つても面倒だから着換へないのか、吾輩には分らぬ。但し此丈は失戀の爲とも思はれない。

兩人が出て行つたあとで、吾輩は一寸失敬して寒月君の食ひ切つた蒲鉾の残りを頂戴した。吾輩も此頃では普通一般の猫ではない。先づ桃川如燕以後の猫か、グレーの金魚を喰んだ猫位の資格は充分あると思ふ。車屋の黒杯は固より眼中にない。蒲鉾の一切位頂戴したつて人から彼此云はれる事もなからう。それに此人目を忍んで間食をするといふ癖は、何も吾輩猫族に限つた事ではない。うちの御三杯はよく細君の留守中に餅菓子杯を失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬して居る。御三許りぢやない現に上品な仕付を受けつゝあると細君から吹聴せられて居る小兒ですら此傾向がある。四五日前のことであつたが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覺まして、まだ主人夫婦の寐て居る間に食ふ麵麴の幾分に、砂糖をつけて食ふのが例であるが、此日は丁度砂糖壺が卓の上に置かれて匙さへ添へてあつた。いつもの様に砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖をすくひ出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。少らく兩人は睨み合つて居たが、大きいのが又匙をとつて一杯をわが皿の上に加へた。小さいのもすぐ匙をとつてわが分量を姉と同一にした。すると姉が又一杯すくつた。妹も負けずに一杯を附加した。姉が又壺へ手を懸ける、妹が又匙をとる。見て居る間に一杯一杯々々重なつて、遂には兩人の皿には山盛の砂糖が堆くなつて、壺の中には一匙の砂糖も餘つて居らん様になつたとき、主人が寢ぼけ眼を擦りながら寢室を出て來て切角しやくひ出した砂糖を元の如く壺の中へ入れて仕舞つた。こんな所を見ると、人間は利己主義から割り出した公平といふ念は猫より優つて居るかも知れぬが、智慧は却つて猫より劣つて居る様だ。そんなに山盛にしないうちに早く嘗めて仕舞へばいいと思つたが、例の如く、吾輩の言ふ事杯は通じないのだから、氣の毒ながら御櫃の上から黙つて見物して居た。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩いたのか、其晩遅く歸つて来て、翌日食卓に就いたのは九時頃であつた。例の御體の上から拜見して居ると、主人はだまつて雑煮を食つて居る。代へては食ひ、代へては食ふ。餅の切れは小さいが、何でも六切か七切食つて、最後の一切れを椀の中へ残して、もうよさうと箸を置いた。他人がそんな我儘をすると、中々承知しないのであるが、主人の威光を振り廻はして得意なる彼は、濁つた汁の中に焦げ爛れた餅の死骸を見て平氣で澄まして居る。妻君が袋戸の奥からタカヂヤスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利かないから飲まん」といふ。「でもあなた澱粉質のものには大變功能があるさうですから、召し上つたらいゝでせう」と飲ませたがる。「澱粉だらうが何だらうが駄目だよ」と頑固に出る。「あなたはほんとに厭きつぱい」と細君が獨言の様にいふ。「厭きつぱいのぢやない薬が利かんのだ」それだつて先達中は大變によく利く／＼と仰つて毎日々々上つたぢやありませんか」「此間うちには利いたのだよ、此頃は利かないのだよ」と對句の様な返事をする。「そんなに飲んだり止めたりしちや、いくら功能のある薬でも利く氣遣ひはありません、もう少し辛防が能くなくつちやあ胃弱なんぞは外の病氣たあ違つて直らないわねえ」と御盆を持つて控へた御三を顧みる。「それは本當の所で御座います。もう少し召し上つて御覽にならないと、とても善い薬が悪い薬かわかりますまい」

と御三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でもいゝ、飲まんのだから飲まんのだ、女なんかに何がわかるものか、黙つて居る」「どうせ女ですわ」と細君がタカヂヤスターゼを主人の前へ突き付けて是非詰腹を切らせ様とする。主人は何にも云はず立つて書齋へ這入る。細君と御三は顔を見合せてにや／＼と笑ふ。こんなときに後からくつ付いて行つて膝の上へ乗ると、大變な目に逢はされるから、そつと庭から廻つて書齋の縁側へ上つて障子の隙から覗いて見ると、主人はエビクタラスとか云ふ人の本を披いて見て居つた。もしそれが平常の通りわかるなら一寸えらい所がある。五六分すると其本を叩き付ける様に机の上へ抛り出す。大方そんな事だらうと思ひながら猶注意して居ると、今度は日記帳を出して下の様な事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池の端、神田邊を散步。池の端の待合の前で藝者が裾模様の春着をきて羽根をついて居た。衣裳は美しいが顔は頗るまづい。何となくうちの猫に似て居た。何も顔のまづい例に特に吾輩を出さなくつても、よささうなものだ。吾輩だつて喜多床へ行つて顔さへ刺つて貰やあ、そんなに人間と異つた所はありあしない。人間はかう自惚れて居るから困る。

寶丹の角を曲ると又一一人藝者が來た。是は脊のすなりとした撫肩の恰好よく出来上つた女で、着て居る薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。白い齒を出して笑ひなが

ら「源ちゃん昨夕は——つい忙がしかつたもんだから」と云つた。但し其聲は旅鴉の如く皺枯れて居つたので、切角の風采も大に下落した様に感ぜられたから、所謂源ちゃんなるもの、如何なる人なるかを振り向いて見るも面倒になつて、懷手の儘御成道へ出た。寒月は何となくそは／＼して居る如く見えた。

人間の心理程解し難いものはない。此主人の今の心は怒つて居るのだから、浮かれて居るのだから、又は哲人の遺書に一道の慰安を求めつゝあるのか、ちつとも分らない。世の中を冷笑して居るのか、世の中へ交りたいのだから、くだらぬ事に肝癪を起して居るのか、物外に超然として居るのか薩張り見當が付かぬ。猫杯はそこへ行くと單純なものだ。食ひ度れば食ひ、寐たければ寐る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶體絶命に泣く。第一日記杯といふ無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人の様に裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する必要があるかも知れないが、我等猫屬に至ると行住坐臥、行尿送尿悉く眞正の日記であるから、別段そんな面倒な手数をして、己れの眞面目を保存するには及ばぬと思ふ。日記をつけるひまがあるなら縁側に寝て居る迄の事を、神田の某亭で晚餐を食ふ。久し振りで正宗を二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大變いゝ。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。タカヂヤスターゼは無論いかん。誰が何と云つても駄